

## 学生大使 実施報告書

氏名：日根知大

学部・学科（コース）・学年：医学部医学科 1 年生

派遣先大学：新モンゴル学園

派遣期間：2024/02/26～2024/03/11

### 1 日本語教室での活動内容

私は、中学二年生を対象に日本の伝統楽器についての授業を行った。雅楽の演奏で主に使用する楽器で、「鞆鼓」や「竜笛」など日本人でも知っている人の少ない楽器の、音色と名前を中心に紹介した。このように、日本古来の有名でない楽器を紹介することにしたのは、モンゴルの学生に絶対に今まで出会ったことのない日本文化を体験してもらうためである。実際に授業をしてみると、学生達の日本に関する関心の高さに非常に驚いた。楽器を紹介するたびに皆ノートに楽器の絵と名前を書き、「(紹介した楽器が)いつ、どこで演奏されていたのか」「演奏者の来ている服は何か」など積極的に質問をしてくれた。中学二年生は、ひらがな・カタカナは習得済みで、漢字もある程度は書けるレベルであり、更にアニメを通して日本文化に関心を持つ学生ばかりだという話は事前に聞いていたが、好みに左右される音楽という分野に全員が興味をもつとは想定していなかった。特に、私が黒板に漢字で「箏」と書くと、難しい漢字であるにもかかわらずノートに真似して皆書いている姿には感銘を受けた。この授業の他にも、日本語授業の様々なサポートを行った。日本での英語の授業のような日本語文法の授業や、漢字の書き方を教える授業、また日本語の文章のスピーキングテストのサポートを行った。どの学生も、積極的に日本語を話そうとしてくれたのが印象的だった。

### 2 日本語教室以外での交流活動

私は、以前別の大学で音楽学を専攻しており、モンゴルの音楽教育がどのように行われているか興味があったため、中学生の音楽の授業に参加させていただいた。授業では、合唱コンクールに向けての練習が行われており、驚くべきことに、日本語で「旅立ちの日に」を練習していた。私は急遽伴奏で合唱に参加させてもらった。実際に中学生に囲まれてピアノを弾き、感じたのは中学生たちの耳の良さである。彼らの日本語の発音はとても明瞭で、とてもモンゴル人が歌っているとは思えないほどであった。さらに、自分と他の声部のメロディの違いをしっかりと理解し、一度間違えたとしてもピアノで音の一つ出してあげるとすぐに修正して歌うことができていた。直ちに「モンゴル人は耳が良い」と結論付けることはできないが、モンゴルの伝統的な馬頭琴のポリフォニックな音色や、日本語に比べて多彩な音を持つモンゴル語に、彼らは慣れているためにそのようなことが当たり前になってしまっているのではないかと思う。伝統楽器の授業も含め彼らの音楽的センスには驚かされた。

また、日本の遊びを通して交流を行った。小学生とは一緒にあやとりをやった。全く言葉は通じなかったが、皆の楽しい気持ちが伝わりとても嬉しかった。また、日本語のかかるたや折り紙を

## 【学生大使 実施報告書】

高校生と一緒に楽しんだ。

### 3 参加目標への達成度と努力した内容

このプログラムを通して達成したい目標は大きく分けて二つあった。まず一つ目は、言葉が通じない中でも、コミュニケーションを行い、モンゴルの人達と仲良くなることである。将来医者になったときに、言葉の通じない外国人の治療を行うかもしれない。そのときに、しっかり意思疎通を行って治療を行えるように「言葉が通じない」という経験を今のうちにしておきたいと考えていた。私は二週間で二つの家庭でホームステイをしたが、最初のホームステイ先では日本語が通じたため、意思疎通に問題はなかった。しかし二つ目のホームステイ先は、日本語は誰も話せず、英語もあまり話せないという家庭であったため、意思疎通がほとんどできないという状況だった。簡単な英単語とジェスチャーで自分の気持ちを伝えたり、Google 翻訳を通じて会話を試みたりしたが、大雑把な気持ちしか伝わらないし、Google 翻訳も日本語からモンゴル語への翻訳があまり上手いかず、本当に苦勞した。しかし、一緒に食事をしたり日本の遊びを一緒にやったりするうちに、段々と何を考えているのかお互いにわかるようになった。不思議な経験だった。二つ目の目標は音楽を中心に、モンゴルの人々の感性や文化を知ることである。これは医者を志す前に自分が真剣に取り組んでいた「音楽学」に関する目標である。これは日本語教室や中学音楽の授業に参加したことで少しは達成できたと思う。

### 4 プログラムに参加した感想

最も感じたことは、渡航以前のイメージが実際のモンゴルと乖離していたということである。渡航前にモンゴルに関して知っていたことは、モンゴルが日本で活躍する力士の出身地であることと、モンゴル人は遊牧民族であり、ゲルで生活しているということであった。日本とは全く違う未知の国と考えていた。しかし、全くそのようなことはなかった。確かに、ウランバートルを出て田舎の方に行くとゲルがあり、ラクダや馬が雪の中を歩き回っており、予想通りのモンゴルが広がっていた。ゲルでは「嗅ぎたばこ」の挨拶や馬乳酒などモンゴル独自の文化を経験した。しかしウランバートルは大きなビルや建物が並び、日本とあまり変わらないデパートやスーパーがあり、更に KFC やピザハット、コンビニが多く立ち並んでいた。日本と全く違う国ではなく、逆に身近な国であるように感じた。このように、自分の中にあっただけの常識が次々に崩れていくような感覚は今回が初めてだった。

### 5 今回の経験を踏まえた今後の展望

今後行いたいことは二つある。一つ目は夏のモンゴルを体験するということである。今回は冬のモンゴルであったため、田舎での草原体験を行うことができなかった。日本に帰った後、ホストファミリーから「夏にまた来てね」という温かいメッセージを頂いたので、次はもう少しコミュニケーションが取れるようにモンゴル語を勉強してから夏に訪問したい。二つ目は世界の音楽教育に関して深く調べるということである。今回の日本語教室での伝統楽器の授業や合唱練習への参加を通じて、モンゴルでの音楽の教育のされ方やモンゴルの伝統楽器の伝承の仕方に非常に興味を持った。またそれと同時に、他の国では音楽はどのように教育がなされているのか興味が

## 【学生大使 実施報告書】

湧いてきた。一度区切りをつけていた音楽学の研究を再開し、世界の音楽教育に関するテーマで論文を書いてみたい。

6 現地での活動写真

写真1：日本語授業でのサポートの様子



写真2：ゲルの内部



写真3：新モンゴル学園の生徒たちと日本のかるたで遊ぶ様子



写真4：休日にラクダに乗る様子

